

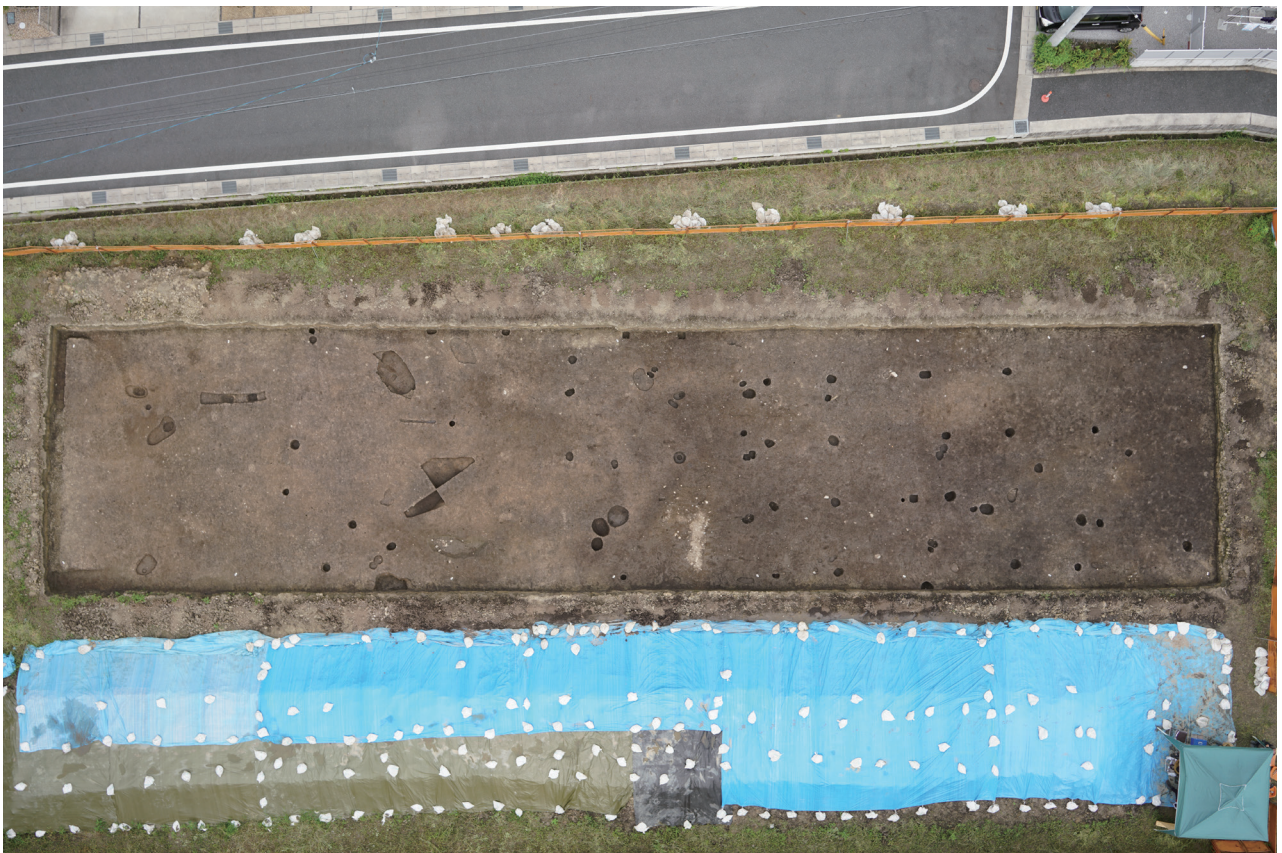
貴生川遺跡第5次発掘調査報告書

2022

甲賀市教育委員会



巻頭カラー1 調査地全景（北から）



巻頭カラー2 調査区全景（垂直）



巻頭カラー 3 SK001 須恵器出土状況



巻頭カラー 4 SK001 出土須恵器

序

甲賀市は滋賀県の南東部に位置し、東は三重県、南は京都府と接しています。市内には古くから東海道といった主要街道が通り、現代でも新名神高速道路や国道1号が通るなど、交通の要衝でもあります。

市内には「紫香楽宮跡」・「垂水斎王頓宮跡」・「甲賀郡中惣遺跡群」・「水口岡山城跡」といった国指定史跡があるほか、多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

埋蔵文化財は地中に埋もれていることから、普段目にする機会が少なく、発掘調査によって初めて明らかになります。この地中に残された文化財は、先人たちが築いてきた歴史であり、今の甲賀市へと繋がる郷土の大切な財産です。

本報告書で取り上げる「貴生川遺跡」ではこれまでの発掘調査によって、鎌倉時代から室町時代にかけての方形居館や、甲賀衆の城館が発見されるなど、中世甲賀の歴史を解明する上で貴重な成果が挙がっています。

本報告書に掲載する調査成果が本市の歴史を解明する一助となり、市民の皆様をはじめ、多くの方に知っていただき、広く活用されることを切に願っています。

最後になりましたが、本調査の実施に多大なご協力をいただきました開発事業者及び調査関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和4年（2022年）3月

甲賀市教育委員会
教育長 西村 文一

例 言

1. 本書は甲賀市教育委員会が令和3年度に実施した貴生川遺跡第5次発掘調査報告書である。
2. 調査原因は個人事業者による集合住宅建設である。
3. 甲賀市教育委員会における調査体制は以下の通りである。

調査主体 甲賀市教育委員会教育長 西村 文一

調査事務局 甲賀市教育委員会事務局 歴史文化財課

課 長 鈴木 良章

参 事 糸田 美佐登

課長補佐 竹原 勝敏

埋蔵文化財係長 小谷 徳彦

主査 渡部 圭一郎

技師 伊藤 航貴（調査担当）

4. 現地調査および整理調査にあたり、下記の方々の協力を得た（敬称略・五十音順）
市田まち子 北林恭子 寺田昌裕 西尾均 平井正義 平本瞳 藤井逸司 藤本安弘
5. 本書の執筆・編集は伊藤が行った。また、本書に掲載した図面の作成は伊藤が担当し、市田と平本が作業にあたった。
6. 本書で使用した水準高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標については、世界測地系に準拠する。なお、本書で用いる北は座標北である。
7. 本書で使用する遺構略号は次の通りである。
SB：掘立柱建物 SK：土抗 SP：ピット SX：その他不明遺構
8. 本書で報告した発掘調査で出土した遺物や図面・写真類については、甲賀市教育委員会が保管している。
9. 基準点測量および遺構空撮図化は株式会社アコードに業務委託した。

目次

第1章 周辺環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査経緯と経過	5
第2節 既往調査の概要	6
第3節 調査経過の概要	7
第4節 現地調査日誌抄	7

第3章 発掘調査

第1節 基本層序	8
第2節 遺構	8
第3節 出土遺物	12

第4章 まとめ

第1節 古墳時代後期	14
第2節 平安時代末から鎌倉時代前半	18
第3節 まとめ	19

挿図

図 1	甲賀市位置図	1
図 2	貴生川遺跡周辺の遺跡分布図	2
図 3	調査地位置図	5
図 4	調査区位置図	6
図 5	調査区西壁土層断面図	9
図 6	遺構平面図	10
図 7	掘立柱建物 SB002 平面図	11
図 8	土坑 SK001 平面・断面図	11
図 9	出土遺物実測図	13
図 10	古墳時代の貴生川遺跡遺構図	14
図 11	植遺跡遺構変遷図	15
図 12	下川原遺跡遺構変遷図	16
図 13	大鳥居遺跡遺構平面図	17
図 14	貴生川遺跡（Ⅲ期 - iii段階）遺構図	18

巻頭カラー

- 巻頭カラー 1 調査地全景（北から）
- 巻頭カラー 2 調査区全景（垂直）
- 巻頭カラー 3 SK001 須恵器出土状況
- 巻頭カラー 4 SK001 出土須恵器

図版

- 図版 1 SK001
- 図版 2 SK001、SK072
- 図版 3 SB002
- 図版 4 SP003、SP006
- 図版 5 SP008、SP013
- 図版 6 出土遺物 1
- 図版 7 出土遺物 2
- 図版 8 出土遺物 3
- 図版 9 出土遺物 4

第1章 周辺環境

第1節 地理的環境

貴生川遺跡が所在する甲賀市は滋賀県の南東部に位置し、東から南は三重県、西は京都府と接している。面積は481.69 km²であり、高島市、長浜市に次いで県内3番目の広さである。市域を国道1号や新名神高速道路といった主要道路が東西に貫いており、関西圏と中部圏をつなぐ地点に甲賀市は位置している。

市内の東には、標高1,000 m級の御在所山から油日岳の鈴鹿山脈、南には標高500～700 mの飯道山をはじめとする信楽山地があり、これらに挟まれた地域に標高200～300 mの水口丘陵、甲賀丘陵、甲南丘陵の3つの丘陵が広がっている。また、市内には鈴鹿山系を源流とする野洲川と杣川が東から西へと流れている。野洲川は水口丘陵と甲賀丘陵、杣川は甲賀丘陵と甲南丘陵の間を流れ、湖南市の市境近くの水口町泉付近で合流している。

貴生川遺跡は、甲賀市水口町貴生川に所在する。貴生川地域は、甲賀丘陵と甲南丘陵に挟まれた「杣谷」の入口にあたる。

遺跡は杣川が形成した河岸段丘上に位置し、遺跡より西側は野洲川と杣川が運んだ堆積層で沖積低地が形成される。遺跡の南側は2 mを越える段丘崖となっており、杣川を見下ろすような立地をしている。

第2節 歴史的環境

貴生川遺跡ではこれまでの発掘調査で、古墳時代中期の竪穴建物、平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物・柵・溝・土坑、安土桃山時代の城館を確認している。また、市内の発掘調査で初めて弥生時代の土器を確認しており、周辺で弥生時代の遺構を確認する可能性が高い。ここでは、野洲川と杣川流域に分布する遺跡を中心に、貴生川遺跡周辺の歴史的環境を述べていく。

縄文時代の遺跡は、油日縄文遺跡、寺山遺跡、矢川寺遺跡が挙げられる。油日縄文遺跡は、油日岳の山麓に位置する市内で最も古い、縄文時代早期の集落遺跡である。縄文早期の押型文土器や貯蔵穴などの遺構を確認している。遺跡の立地、内容などは鈴

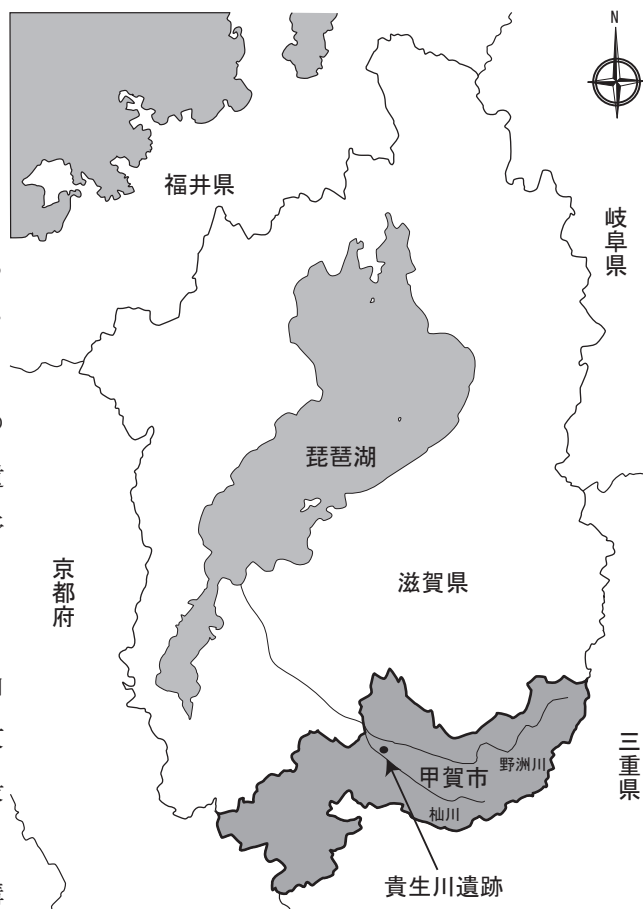


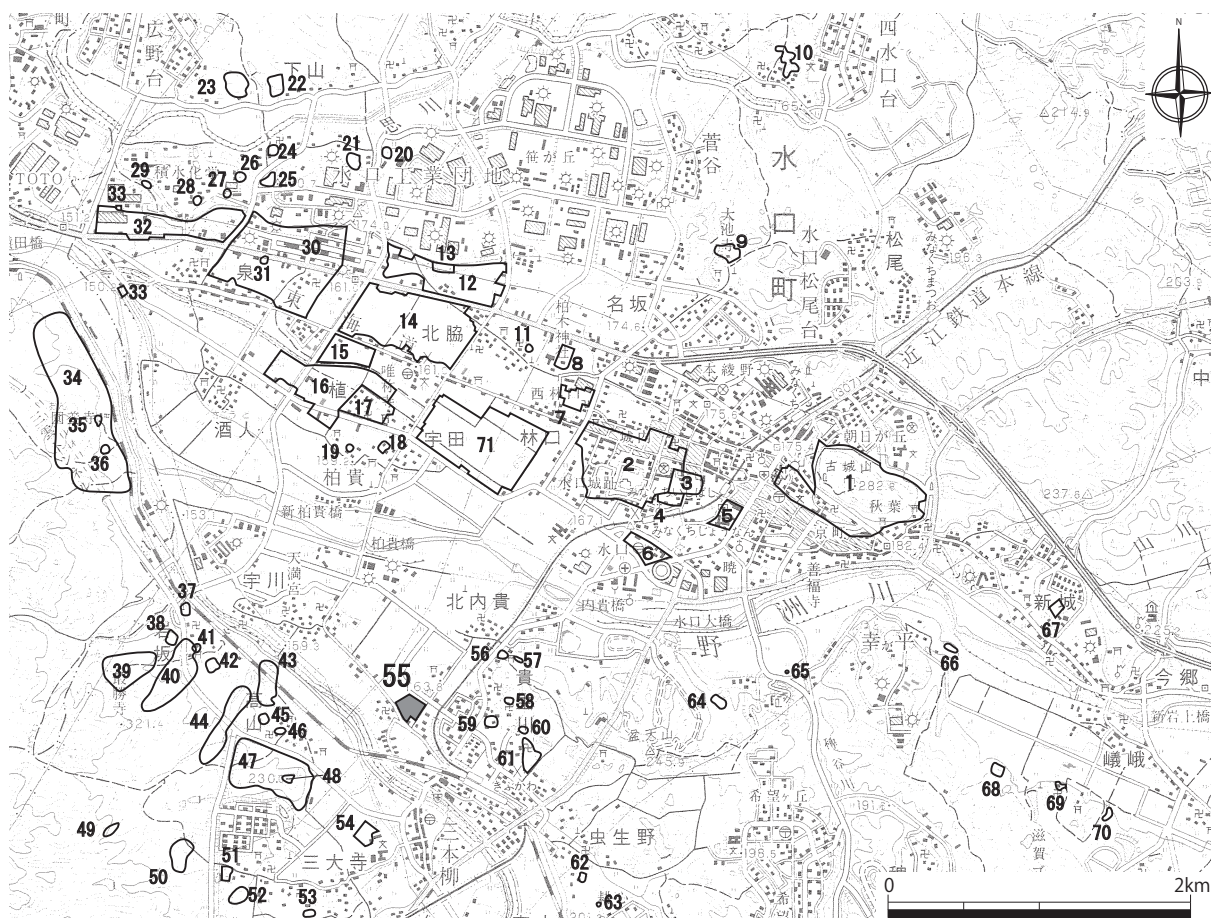
図1 甲賀市位置図

鹿山系の山麓に点在する遺跡と類似しており、その関連性が想定されている。

甲南町新治に位置する寺山遺跡では、縄文時代早期から中期にかけての土器が出土しており、石器も一定量出土している。また、矢川寺遺跡は甲南町森尻の北東、杣川右岸の河岸段丘上に位置する縄文時代から江戸時代の遺跡である。発掘調査では、縄文時代の遺物として石鏃や磨石、敲石、剥片が出土し、剥片の存在から周辺で石器を製作していた可能性がある。

市内には弥生時代の遺跡が少なく、鈴鹿山脈の山中に所在する山女原遺跡や鈴鹿峠遺跡から、弥生時代初頭から古墳時代の遺物がわずかに出土している。

古墳時代に入ると、野洲川流域において植遺跡のような大規模な遺跡が出現する。植遺跡は、水口町植に位置し、発掘調査によって掘立柱建物 17 棟、竪穴建物 119 棟、甕棺墓 4 基など多数の遺構が確認されている。特に注目すべき点は、3 棟の大型倉庫群である。倉庫の時期は 5 世紀



- 1 水口岡山城跡 2 水口城遺跡 3 美濃部出屋敷遺跡 4 富川屋敷遺跡 5 古御殿遺跡 6 城南遺跡 7 西林口遺跡
 8 柏木神社遺跡 9 大池寺遺跡 10 山村城遺跡 11 里北脇遺跡 12 北脇遺跡 13 北脇城遺跡 14 北脇南遺跡
 15 花池遺跡 16 植遺跡 17 植城遺跡 18 山中氏屋敷遺跡 19 西出館遺跡 20 東迎山城遺跡 21 西迎山城遺跡
 22 下山北城遺跡 23 津山城遺跡 24 伴屋敷城遺跡 25 下山城遺跡 26 伴屋敷遺跡 27 東籬子塚古墳 28 西籬子塚古墳
 29 泉古窯跡 30 北泉遺跡 31 塚越古墳 32 下川原遺跡 33 旧東海道横田渡跡 34 園養山古墳群 35 園養寺遺跡
 36 三雲寺遺跡 37 岩坂古墳群 38 平子城遺跡 39 最勝寺境内遺跡 40 岩坂南古墳群 41 岩坂屋敷遺跡
 42 源太屋敷城遺跡 43 御姫屋敷城遺跡 44 百合野古墳群 45 高山屋敷遺跡 46 一学殿屋敷遺跡 47 高山古墳群
 48 高山氏城遺跡 49 奥百合野古墳群 50 三大寺落し谷古墳群 51 小山城遺跡 52 奥谷城遺跡 53 三大寺竹中城遺跡
 54 竹石遺跡 55 貴生川遺跡 56 内貴城遺跡 57 川田山古墳群 58 内貴尾山城遺跡 59 内貴殿屋敷遺跡 60 落シ谷遺跡
 61 北虫生野城遺跡 62 虫生野堂の前城遺跡 63 森尻古墳 64 北内貴城遺跡 65 高塚古墳 66 波瀾ヶ平古墳群
 67 北沢遺跡 68 巖峨西城遺跡 69 千光寺遺跡 70 巖峨古墳群 71 柏木遺跡

図2 貴生川遺跡周辺の遺跡分布図

中頃とみられ、これらの倉庫は物資の保管基地として建てられ、圧倒的な姿を示すための「見せる倉庫建物」であったと考えられている。大型倉庫が廃絶した後も、竪穴建物を中心とする集落が営まれ、そこでは他地域との交流や手工業生産が行われていたとみられる。また、6世紀中頃からは、棟持柱をもつ高床建物や大型の掘立柱建物が建てられ、これらは首長級の有力者の住居と考えられている。植遺跡は、一般的な集落とは様相の異なる遺跡であり、一部は県史跡に指定されている。

杣川流域の古墳時代の集落遺跡では、竹石遺跡や大鳥居遺跡が挙げられる。

竹石遺跡は水口町三大寺の杣川左岸の中位段丘に位置している。遺構は古墳時代と鎌倉から室町時代にかけての2つの時期を確認している。

大鳥居遺跡は甲南町池田の杣川沿いの平野部に位置している。発掘調査では集落の痕跡は発見できなかったが、古墳時代後期に使用されていたと考えられる溝跡を検出している。この溝は灌漑用水路として開削されたとみられ、杣川流域の古墳時代の治水や集落経営を知る手がかりとなる遺跡である。

杣川左岸の飯道山東麓には、6世紀以降の群集墳が築かれ、甲賀群集墳とも呼ばれている。園養寺古墳群（湖南市三雲）や岩坂古墳群、高山古墳群などがあり、300基を確認している。この数は、多くの人々が水口を中心とする地域開発に携わっていたことを示している。

奈良時代から平安時代の遺跡は、野洲川流域で多く確認されている。下川原遺跡は、水口町泉に位置し、7世紀代に最も繁栄した遺跡である。発掘調査では竪穴建物を中心に、掘立柱建物や溝、土坑など多くの遺構を確認している。

下川原遺跡に続く遺跡として、北脇遺跡が挙げられる。北脇遺跡では、9世紀から12世紀の遺構や遺物を確認している。発掘調査では、1間×5間の掘立柱建物や多くの緑釉陶器、「徳西庶家」と記された銅印が出土しており、一般的な集落ではなく官衙的な性格をもった遺跡であると考えられている。

この時代の遺跡は、北泉遺跡や北脇南遺跡、西林口遺跡なども挙げられるが、小規模な試掘調査の実施にとどまっており、詳細は明らかではない。しかし、出土した遺物の時代順に見ていくと、下川原遺跡→北泉遺跡→北脇遺跡・北脇南遺跡→西林口遺跡となり、時代が下るにつれて、野洲川の下流から上流へと人々の生活拠点が移動したことがうかがえる。

杣川流域では古代時代までの遺跡数は少ないが、中世に入るとその数は増大する。その多くが中世に築かれた城館である。市内には約180もの中世城館を確認している。その多くが「単郭方形」という共通した形態で、規模も半町四方と同じである。築城主体は、土豪の甲賀衆と考えられており、それぞれの支配する地域で築城したものとみられる。

これまで市内の城館を発掘した事例は、水口町の貴生川遺跡や植城遺跡、甲南町の竜法師城、甲賀町の補陀楽寺城、青木城、上野城、高野城、信楽町の小川城が挙げられる。築城時期は概ね16世紀後半頃と推定されており、天正13年(1585)年の豊臣秀吉による甲賀衆の改易処分、いわゆる「甲賀ゆれ」ののち、廃城となったと考えられている。

中世の甲賀は城館だけでなく、集落遺跡も試掘調査や分布調査で発見しており、文殊院遺跡、

貴生川遺跡、竹石遺跡、沢ノ尻遺跡などが挙げられる。

文殊院遺跡は、甲南町池田の杣川左岸の河岸段丘上に位置し、発掘調査により瓦器を中心に多くの中世土器が出土した。ここで出土した瓦器は、近江において生産された「近江型瓦器」と呼ばれるものとは一概には言えず、大和型や伊賀型の影響を受けていると考えられるものが多い。遺跡が位置する甲南町池田は、「檜尾神社文書」に、「近江国甲賀上郡興福寺御領池田之保」とあり、興福寺領であったことがわかる。そのため、当地域と大和との間には深いつながりがあり、それが土器にも表れている。

中世の甲賀は、小規模な領主が同族を基盤として地域を集团的に支配・管理していた。この一揆的な結合を「同名中」と呼び、戦国時代末期になると、同名中が連合して「郡中惣」として発展した。

この一揆的な結合の甲賀郡中惣による統治は、天正13年(1585年)の豊臣秀吉による甲賀衆の改易処分、いわゆる「甲賀ゆれ」によって終焉を迎え、郡中惣は解体された。甲賀郡中惣に代わって甲賀郡を支配したのは、豊臣政権である。地域支配の拠点として秀吉の命により、中村一氏が水口岡山城を築城した。水口岡山城は中村一氏、増田長盛、長束正家の3人が城主となったが、慶長5年(1600年)の関ヶ原の戦いの後、廃城となる。慶長6年には近世東海道の宿駅に指定され、水口は徳川政権の直轄支配となり、3代将軍家光の上洛に伴い水口城が築かれた。その後、天和2年(1682)年に水口藩が置かれ、江戸時代を通して宿駅として整備されていく。

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査経緯と経過

貴生川遺跡は、平成20年度に試掘調査によって新たに発見した遺跡であり、平成21・23年度に補足の試掘調査を実施した。その後、平成25・26年度に土地区画整理事業に伴う本発掘調査を実施し、平成29年度にも宅地造成に伴う本発掘調査を実施した。

今回、遺跡内で個人事業者による集合住宅建設が計画されたが、開発予定地はこれまで試掘および本発掘調査を実施していない範囲であった。本来であれば、試掘調査を実施し、保護対象とする範囲を決定するところである。しかし、隣接地で本発掘調査が実施されており、開発予定地においても遺構が確認される可能性が高いことから、事業者と協議し、試掘調査を実施せず、工事により破壊される恐れのあるすべての範囲を記録保存することとした。

甲賀市教育委員会を調査主体とし、現地調査を令和3年7月9日から令和3年8月31日に実施し、調査面積は360㎡となった。整理調査を現地調査終了後から令和4年3月31日に実施した。

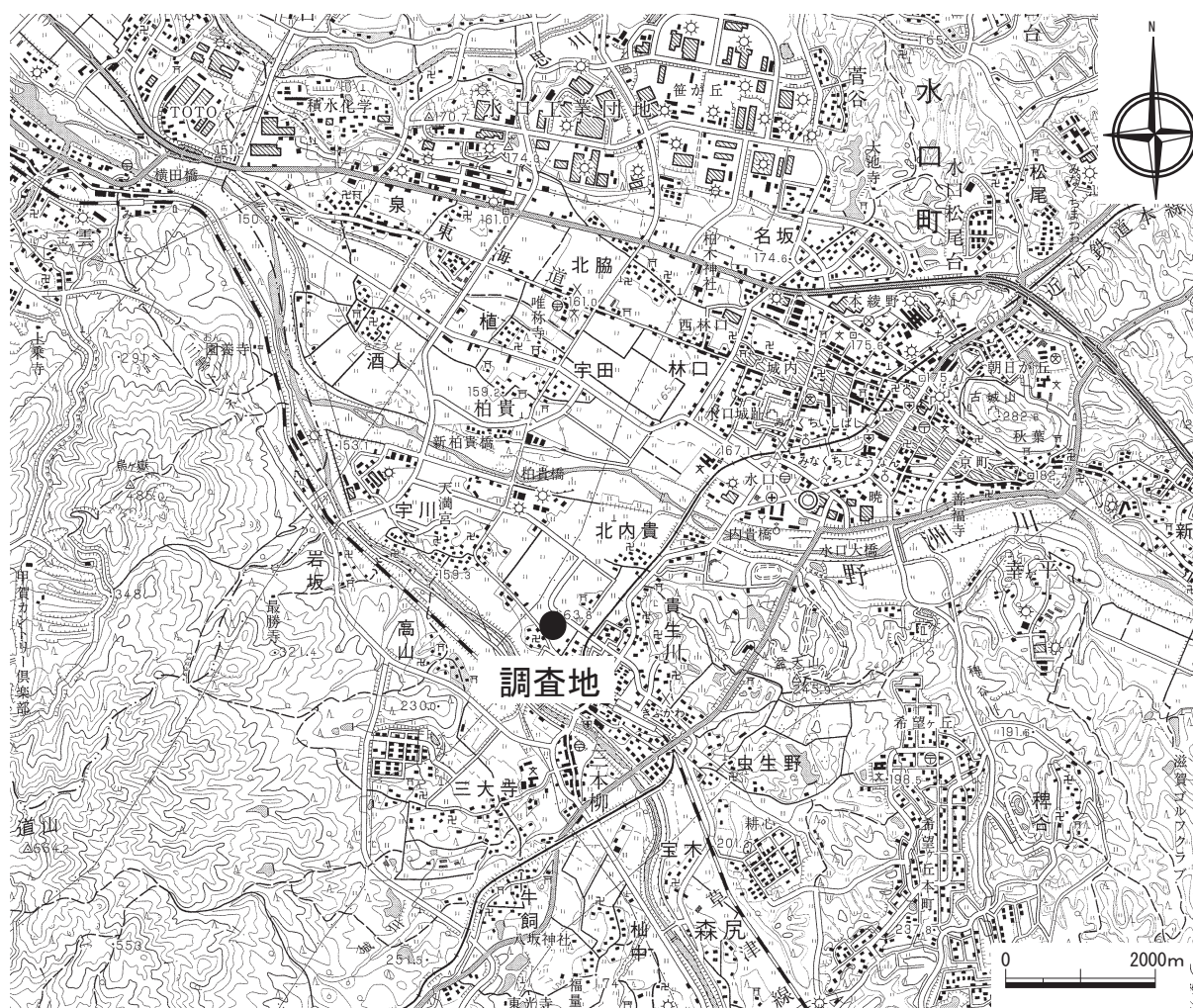


図3 調査地位置図

第2節 既往調査の概要

貴生川遺跡では、これまで4次にわたる試掘・本発掘調査を実施している。第1・2次は試掘調査であり、ここでは既往の本発掘調査の概要を記述する。なお、詳細な調査成果は、発掘調査報告書を参照されたい。

平成25・26年度調査（第3次調査）

土地区画整理事業に伴う本発掘調査である。調査の結果、弥生時代から安土桃山時代の遺構・遺物を確認した。主な遺構は、古墳時代中期の竪穴建物、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物・柵・溝・土坑など、安土桃山時代の城館である。平安時代末から鎌倉時代の集落は、13世紀代に溝・土塁囲いの屋敷が現れ、安土桃山時代に入ると、隣接地で半町四方の単郭方形城館が築城されたことが明らかとなった。

城館は堀と土塁を備え、曲輪内では井戸・土坑・溝などを検出した。江戸時代初頭には廃城となり、堀や井戸などの深さがあるものは、石や砂礫で埋め戻されたことが明らかとなった。

平成29年度調査（第4次調査）

宅地造成に伴う本発掘調査である。調査地は、平成26年度調査で確認した溝・土塁囲いの屋敷地に隣接する箇所で行った。調査の結果、屋敷地を区画する溝を検出し、この屋敷地は、一



図4 調査区位置図

辺 40 m の方形であったことが明らかとなった。また、屋敷地の内部空間は、隣接地で見つかった城館と同じ、一辺約 25 m の規模であったことがわかった。溝と土塁囲いの屋敷地が、安土桃山時代には深い堀と土塁を備えた、防御機能を高めた城館へと変化しており、この調査で、屋敷から城館への変遷過程を明らかとなった。

第3節 調査経過の概要

調査地は、平成 25 年度実施の T 1 の南東側に位置する。調査区は調査地の中央に位置し、その規模は北東—南西約 40 m、北西—南東約 9 m で、面積は 360 m² である。調査前の現状は畑地であった。耕作土の掘削は重機で行い、遺構面の精査および掘削は人力で行った。

令和 4 年 7 月 13 日から 21 日まで重機掘削を行い、終わった範囲から平面精査を開始した。平面精査を進めると、明茶褐色粘質土を確認し、この面でピットや土坑を検出した。7 月 30 日に SK001 を掘削すると、床面に近い地点で須恵器の杯と蓋が出土した。8 月 4 日には SK001 の平面図と断面図を作成し、出土した須恵器を取り上げた。8 月 5 日からは検出したピットの半裁を進め、断面の撮影と実測図を作成した。25 日から委託により空撮を行い、31 日まで埋め戻しを行い、現場作業を完了した。

第4節 現地調査日誌抄

7 月 9 日	現場準備および調査機材を搬入。	4 日	ピットを半裁、SK001 の平面図と断面図を作成する。
10 日	仮設トイレの養生。		SK001 で出土した須恵器を取り上げる。
12 日	工事計画に基づきトレンチを設定し、周囲にフェンスを設置する。	5 日	ピットの土層断面を撮影し、実測図を作成する。
13 日	重機掘削を開始する（～21 日）。	6 日	SK001 完掘する。
14 日	南壁面の精査、トレンチ南側の排水溝を掘削する。	10 日	ピットの土層断面を撮影し、実測図を作成する。
16 日	南壁面、西壁面を精査し、南壁面の土層断面の写真を撮影する。	11 日	SK072 の土層断面を撮影する。
19 日	西壁面を精査し、南壁面の土層断面図を作成する。	20 日	12 日から続いた降雨の影響により、トレンチ内の排水作業と、崩落した壁面を復旧する。
20 日	南半の平面を精査する。	23 日	平面を精査し、トレンチ周辺の整理を行う。
21 日	西壁面と平面を精査する。	24 日	平面と壁面を精査する。
26 日	南半の平面を精査する。	25 日	業者委託による空撮を行う。
27 日	中央の平面を精査する。	26 日	埋め戻しの予定であったが、作業中止。
28 日	北半の平面を精査する。	30 日	重機によりトレンチの埋め戻し作業を行う（～31 日）。
30 日	SK001 を検出し、掘削、須恵器の杯と蓋が出土し、検出状況を撮影する。西壁面の土層断面図を作成する。	31 日	調査機材を返却し、現場撤収する。
8 月 2 日	検出したピットの段下げ、遺構概要図を作成する。		

第3章 発掘調査

第1節 基本層序

基本層序は、上から①灰褐色粘質土（耕作土）、②黄灰色粘質土（床土）、③暗茶褐色粘質土、④明茶褐色粘質土（地山）である。遺構は、④層の上面で検出した。遺構検出面の標高は、調査区南西部で161.3 m、北東部で161.5 mで、北東から南西に向けて低くなる。

第2節 遺構

掘立柱建物 (SB002) (図7)

調査区の北東側で検出した桁行3間（約8.2 m）、梁行3間（約6.5 m）の総柱の掘立柱建物である。平面積は53.3 m²である。建物の主軸はN35° E方向で、柱間寸法は桁行が2.8 m、3.2 m、2.2 m、梁行が2.1 m、2.2 m、2.2 mであり、柱間にばらつきがある。P5のみ梁行の柱筋に揃わないが桁行には揃ってくるため、SB002の柱としている。柱穴は直径30 cm前後で、円形のもものがほとんどである。深さは遺構検出面から約20～30 cmである。埋土は黄灰色粘質土、暗黄灰色粘質土、黒褐色粘質土で、柱痕の周囲に灰褐色粘質土の帯が確認できるものがある。建て替えの痕跡はみられない。

遺物は、P2、P6、P7、P15から土師器、P11から瓦器椀（8、9）、P12から瓦器椀（12～14）、P14から土師器（16、17）が出土した。

土坑 (SK001) (図8)

調査区の南西側で検出した土坑である。長辺1.8 m、短辺1 mの長方形に近い楕円形を呈している。深さは最深部で0.3 m、埋土は暗茶色粘質土（明褐色土含む）の単層である。遺物は、完形の須恵器坏身と蓋が出土している。また、同じく須恵器の坏身と壺の一部が出土している。時期は古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。

ピット (SP056)

調査区中央部で検出したピットである。直径30 cm、深さは20 cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は瓦器椀が出土しており、時期は12世紀後半と考えられる。

ピット (SP075)

調査区南側のトレンチ南端で検出したピットである。直径20 cm、深さ12 cmを測る。埋土は、明黒褐色粘質土で、遺物は須恵器の甕が出土しており、時期は古墳時代後期（6世紀後半）と考えられる。

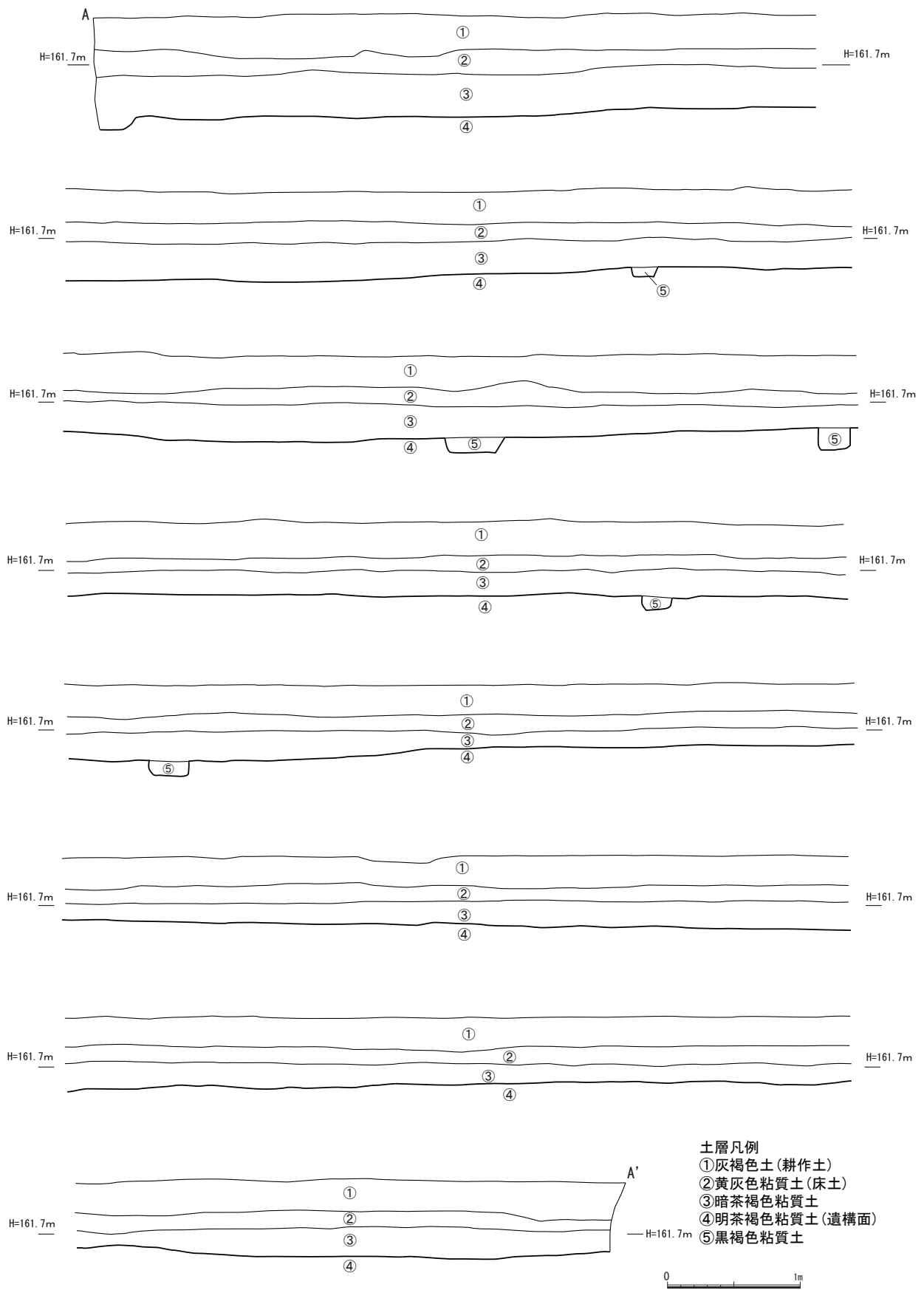


图 5 調查区西壁土層断面图

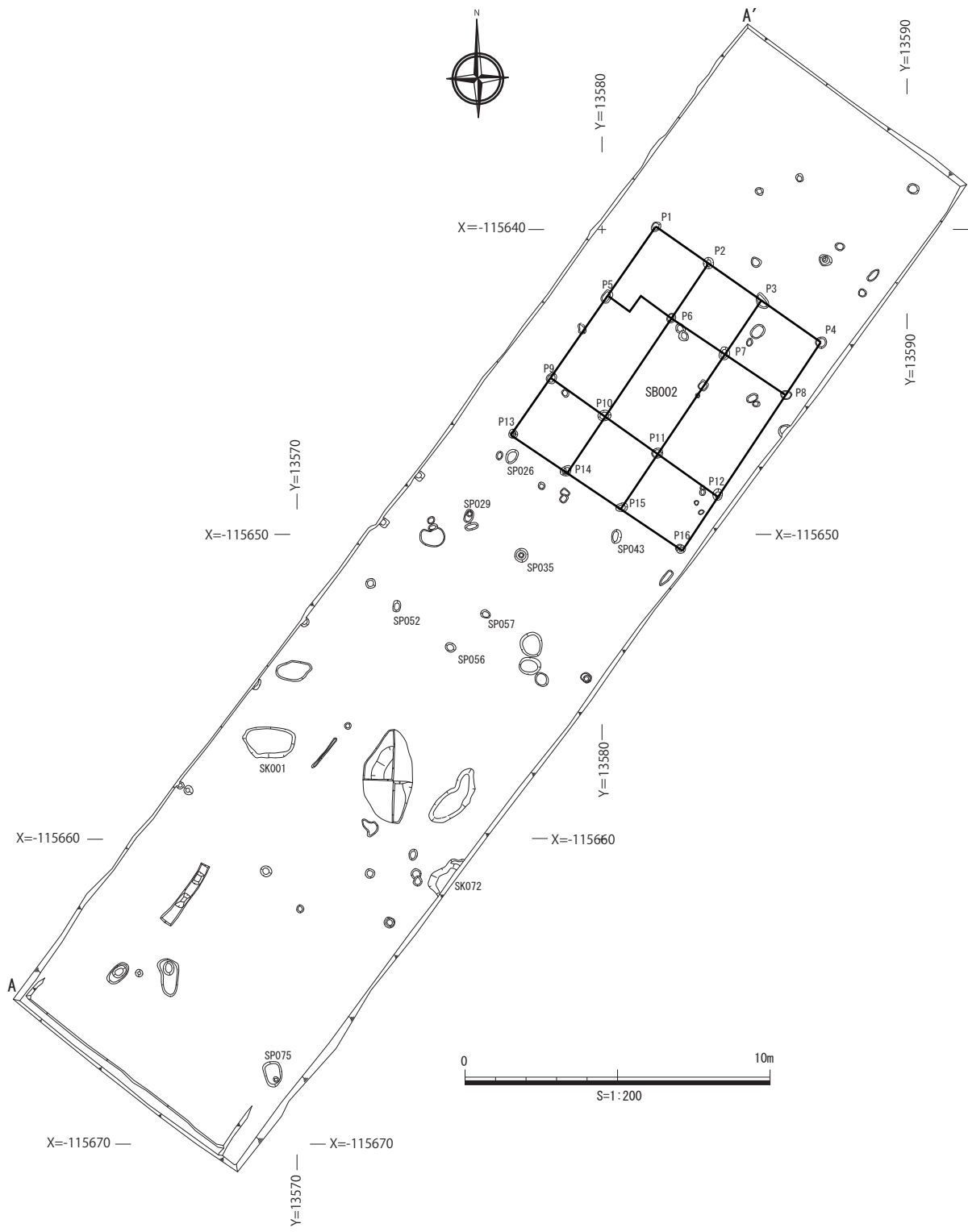


图 6 遺構平面図

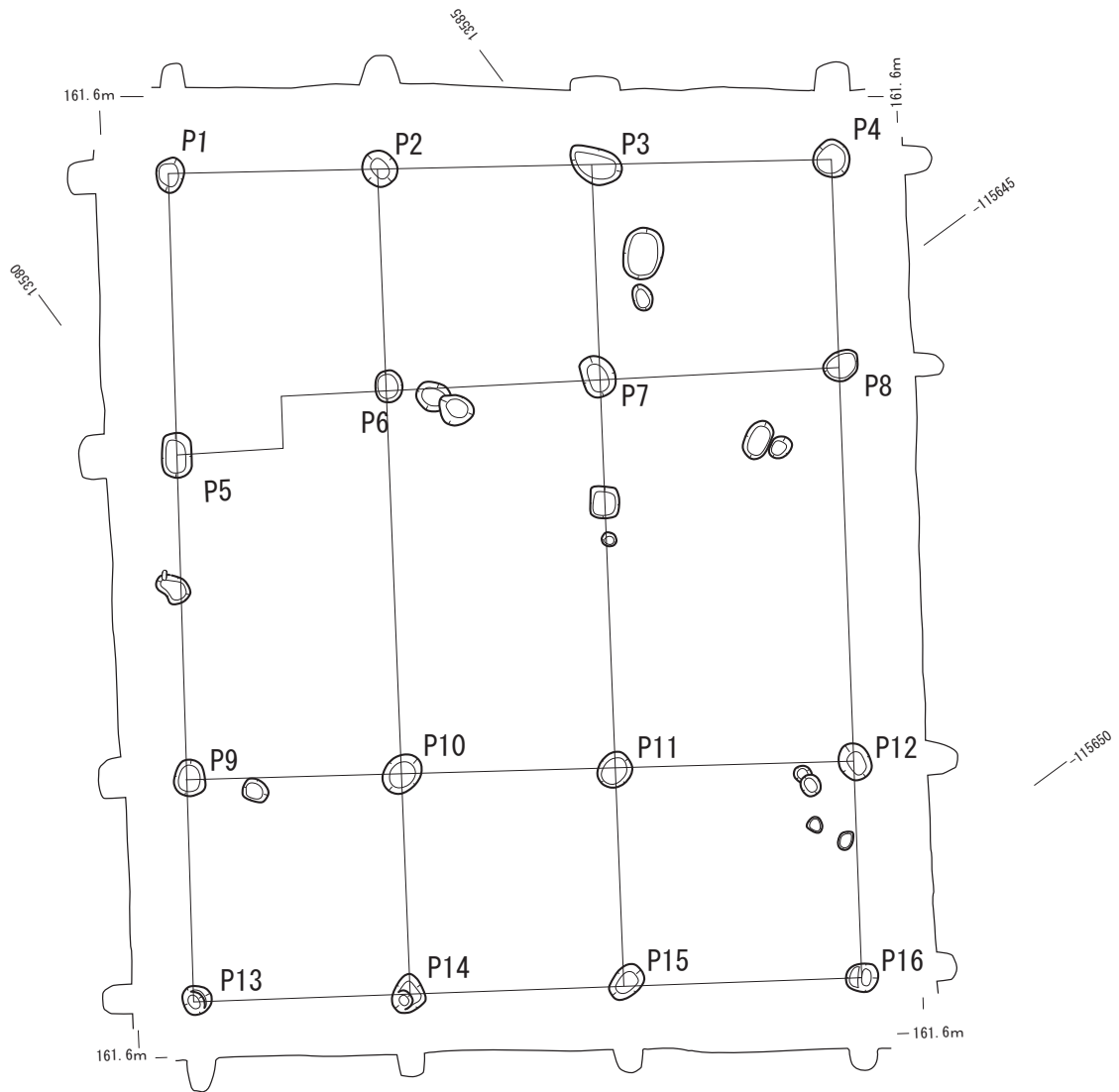


图7 掘立柱建物 SB002 平面图

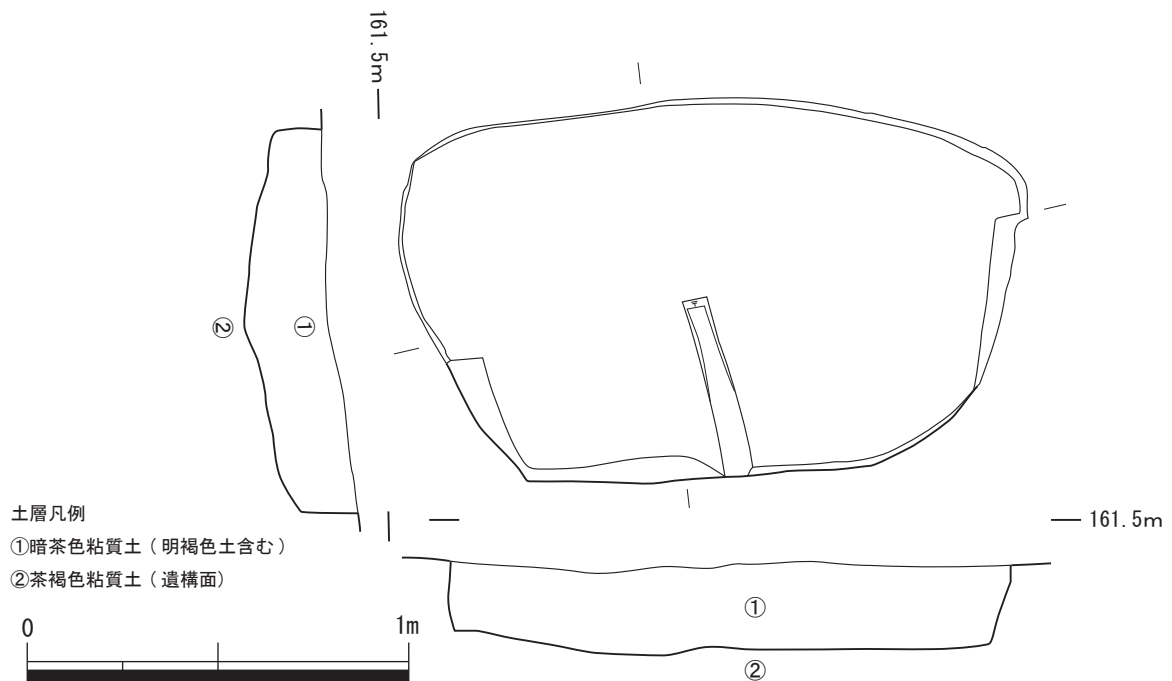


图8 土坑 SK001 平面・断面图

第3節 出土遺物

遺物は、須恵器、土師器、瓦器等が出土している。

SK001

1は須恵器坏H蓋の完形。口径13cm、器高3.7cm。天井部は低く、平らに近い。天井部は回転ヘラケズリ、口縁部から内面にかけて回転ナデで調整する。胎土は2mm程度の砂粒を含むが概ね精良で、焼成は硬質。時期は6世紀後半頃と考えられる。

2は須恵器坏H身の完形。口径11.6cm、器高4.5cm。底部は平らに近く、口縁部はたちあがりは比較的高く、内傾した後直立し、端部は丸い。受部は外上方に延び、端部は丸い。底部外面の1/2を回転ヘラケズリ、他はナデで調整する。胎土は概ね精良で、焼成は硬質。時期は6世紀後半頃と考えられる。出土位置から1と2は、坏身蓋のセット関係にあると考えられる。

3は須恵器坏H身で、口縁部のみ残存する。口径12.4cm、残存高2.7cm。たちあがりは内傾し、受部は幅が狭い。残存部はすべてナデで調整する。時期は6世紀後半頃と考えられる。

4は須恵器の坏Hで、体部のみ残存する。内外面ともにナデで調整する。胎土は精良で、焼成は硬質。

5須恵器の壺。口縁から体部にかけて残存する。口径12cm、残存高7.4cm。口縁は外方へ開き、端部は丸くおさめる。内面はナデで調整し、外面は横方向のカキ目で調整する。外面には自然釉がかかる。胎土は精良で、焼成は硬質、固く焼き締まっている。時期は6世紀後半から7世紀前半頃と考えられる。

6は須恵器壺。底部のみ残存する。底部は丸く、体部は外方へ開き、器壁は薄くなる。底部外面はヘラケズリ、内面はナデで調整する。胎土は精良で、焼成は硬質。時期は不明。

7は須恵器甕。体部のみ残存する。内外面にタタキ目が確認できる。胎土は精良で、焼成は硬質。

SB002-P11

8は瓦器の椀。口縁のみ残存する。口縁端部に沈線が巡る。口径15.2cm。内面にはミガキ調整されるが、外面は摩耗のため確認できない。13世紀前半と考えられる。

9は瓦器の椀。口縁から体部にかけて残存する。口縁端部には沈線が巡る。口径15cm。内外面ともに摩耗のため、調整は不明。

SP056

10は瓦器の椀。口縁から体部にかけて残存する。口縁端部には明瞭な沈線が巡る。口径14.8cm。内面はミガキ調整が密に施される。外面は口縁部には密に施すが、体部はやや粗雑になる。12世紀後半と考えられる。

SB002-P12

11～14は瓦器の椀である。口縁のみもしくは口縁から体部にかけて残存し、口縁端部には沈線が巡る。口径は12cm～14cmに収まる。内面のみミガキで調整し、外面にはミガキはなく、指頭圧痕が確認できる。いずれも13世紀前半頃とみられる。

SP075

15は須恵器の甕。体部のみ残存する。外面には平行タタキ、内面には同心円状のタタキ目を確認できる。

SP076

16は土師器の皿。口縁から底部にかけて残存する。口径8.8cm、器高1.5cm。外面底部には指頭圧痕が確認でき、口縁外面から内面はナデで調整する。13世紀前半と考えられる。

17は土師器の羽釜である。体部のみ残存する。内外面にはハケ目で調整され、外面には煤が付着する。

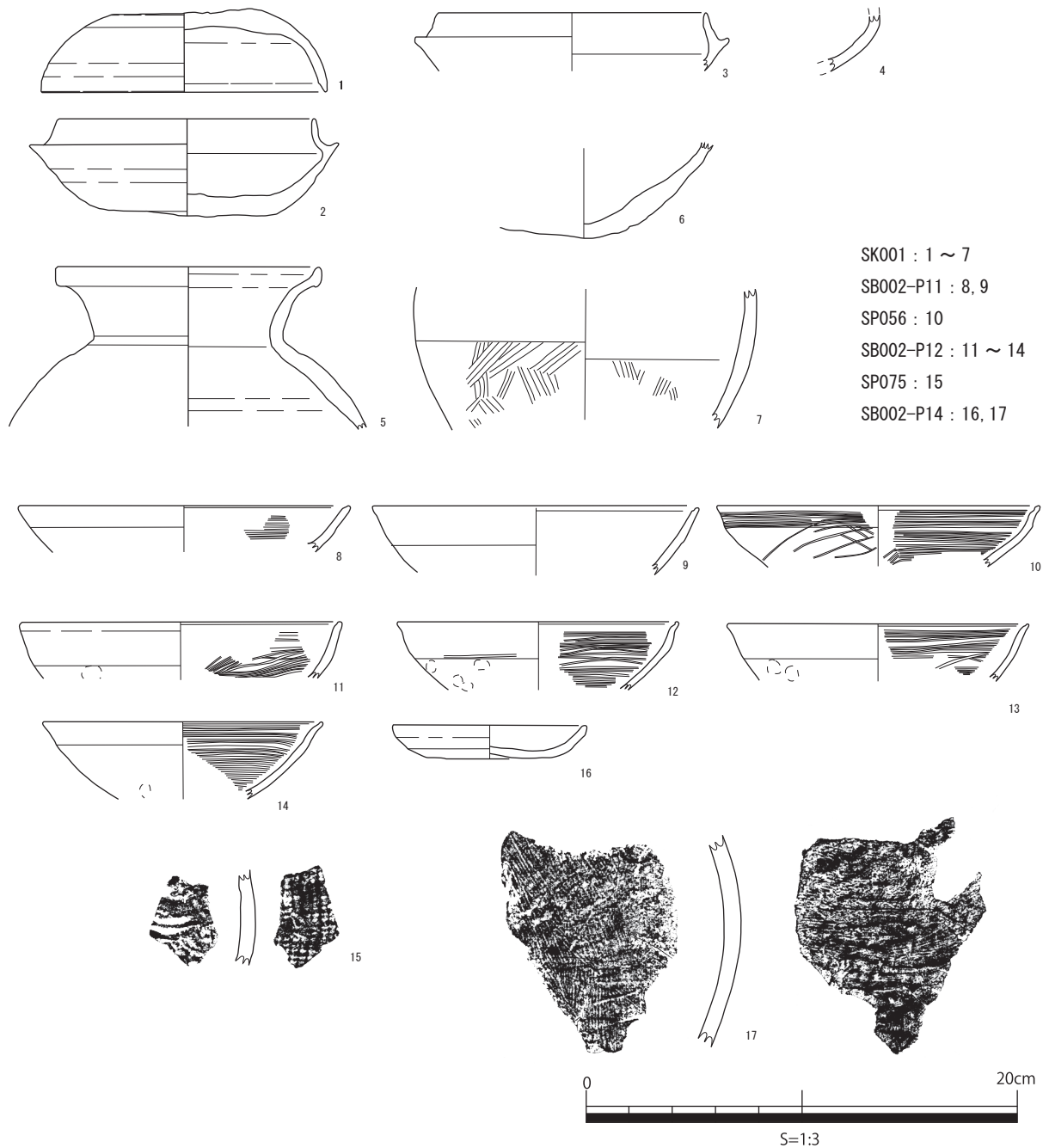


図9 出土遺物実測図

第4章 まとめ

第1節 古墳時代後期

古墳時代の遺構は、第3次調査で竪穴建物を4棟検出している。竪穴建物は遺跡の西端部で検出しており、ほぼ正方形を呈している。すべての建物で作り付けのカマドは確認されておらず、炉もしくは野外炉を使用していたと考えられ、出土遺物から古墳時代中期末頃（5世紀後半）と考えられている。なお、この調査ではピットから古墳時代後期の須恵器が1点出土している。

第5次調査で古墳時代の遺構は、楕円形を呈した土坑を1基のみ検出している。土坑は竪穴建物の位置から東に約50mの位置で検出している。土坑内部から須恵器坏Hの身と蓋がセットで出土している。時期は古墳時代後期（6世紀後半）であり、竪穴建物よりも新しい時期の遺構となる。

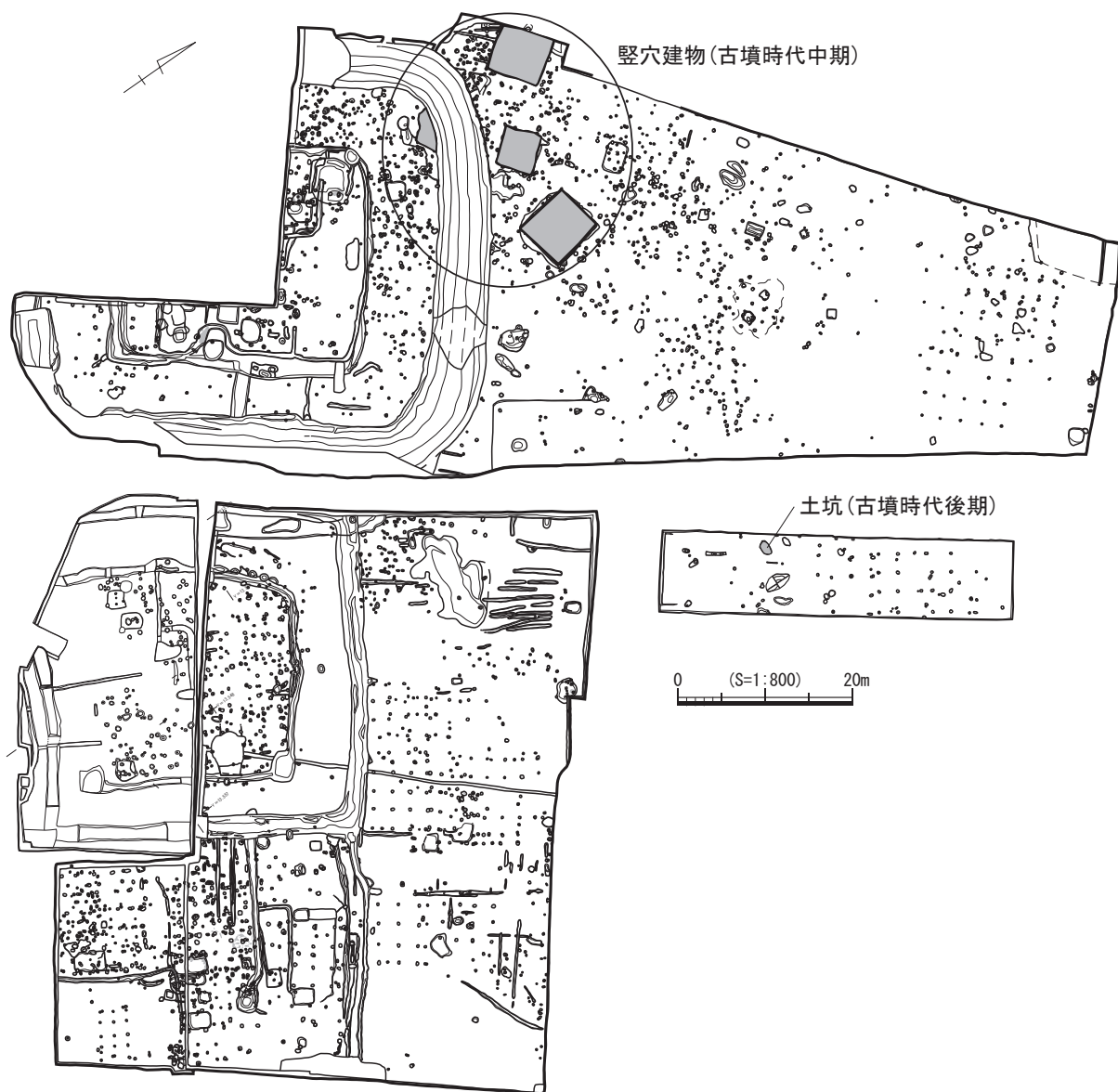


図10 古墳時代の貴生川遺跡遺構図

以上の竪穴建物4棟、ピット1基、土坑1基が、貴生川遺跡で検出されている古墳時代の遺構である。第5次調査で検出された土坑は、集落と関係しているかどうか不明であるが、完形の須恵器が出土しており、第3次調査でもピットから同時期の須恵器が出土していることから、古墳時代後期の集落が存在していた可能性が高い。また、遺跡の東側では未調査であることから、貴生川遺跡では、古墳時代中期に集落が存在し、後期になると遺跡の西端から東側へと移り変わったと考えられる。

市内の遺跡で古墳時代の集落の変遷を追うことができるのは、水口町に位置する植遺跡と下川原遺跡が挙げられる。また、甲南町の大鳥居遺跡では、同時期の遺構を確認している。それぞれの遺跡の様相を概観し、古墳時代の貴生川遺跡について述べていく。

植遺跡

植遺跡は水口町植にある古墳時代の集落遺跡である。遺跡は東西約400m、南北約300mの範囲に広がる。

平成13～14年度に滋賀県教育委員会によって、ほ場整備事業に伴う発掘調査が実施され、掘立柱建物17棟、竪穴建物119棟、甕棺墓4基など多数の遺構が検出されている。そして、植遺跡では大きく分けて3時期の遺構の変遷が明らかとなっている。

第1期は、大型倉庫群が建てられた時期である。大型倉庫は、東西方向に軸をそろえて軒を接する形で3棟検出している。東と中央の倉庫はほぼ同規模で、東西4間×南北4間、床面積68㎡で、西側の倉庫は東西4間、南北4間、床面積49㎡とやや小規模である。倉庫の時期は5世紀中頃とみられる。

第2期は、大型倉庫群が廃絶し、竪穴建物を中心した集落が営まれた5世紀後半頃である。竪穴建物から出土する土器は、近江産のほか東海地方や大阪、奈良、遠くは関東地方の影響を受けているとみられるものも出土している。また、ふいごや鉄滓など鍛冶生産に関連する遺物も出土しており、手工業生産が行われていたと考えられている。この時期は手工業生産をもとに、広範囲の交流が行われていた時期である。しかし、6世紀前半頃に手工業生産は行われなくなり、広範囲の交流も少なくなったようである。

第3期は、祭祀空間や工房群が存在し、それらを統括する有力者の住居などが規則的に配置さ

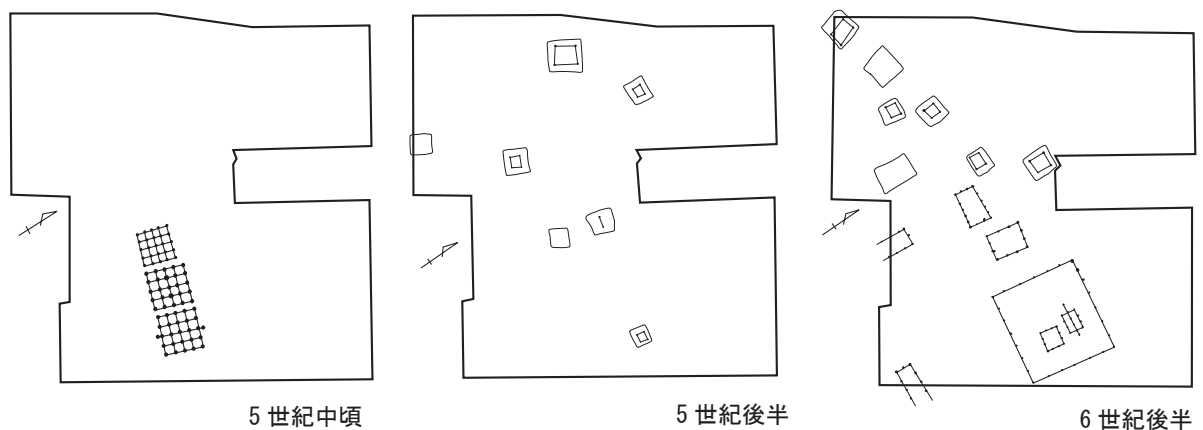


図11 植遺跡遺構変遷図（「甲賀市史第5巻」より引用）

れた集落が現れた、6世紀中頃から後半にかけての時期である。1辺約20.5mの方形の柵で囲まれた区画が形成され、その内部に棟持柱をもつ高床建物と、大型建物が建てられている。その空間の西側には大型の掘立柱建物と竪穴建物が規則的に配置され、南側には2間×4間以上の細長い掘立柱建物が直交して配置される。このような建物配置は公的性格をもつ遺跡や豪族居館の周辺で見られることが多く、豪族居館的な要素を持った集落と考えられている。

このように植遺跡は、一般的な集落とは異なる、この地域の中心的な集落であったとみられる。

下川原遺跡

下川原遺跡は、水口盆地の西端部、湖南省との市境の水口町泉に位置する。遺跡は、東西約1km、南北200～250mの範囲に広がり、ほぼ中央部に北側の水口丘陵から舌状にのびる尾根があり、遺跡を東西に二分する。発掘調査は試掘調査を含めて第11次まで実施し、竪穴建物を中心に掘立柱建物や溝、土坑など多くの遺構を検出している。また、須恵器や土師器のほか緑釉陶器や灰釉陶器、黒色土器、瓦器などの遺物が出土している。

平成17年度の調査では、4段階の遺構変遷を確認した。第1段階は、6世紀末から7世紀初頭の時期で、竪穴建物7棟が当該時期に当たる。第2段階は、7世紀前半から中葉で、竪穴建物が増加し、掘立柱建物や作業工房と考えられる小規模な竪穴建物も確認しており、遺跡の最盛期を迎える。第3段階は、第2段階に引き続き、7世紀中葉までに一定の規模で集落が形成される。第4段階は、建物の数は激減し、集落としての規模が著しく衰退する。

6世紀後半から7世紀初頭の遺構としては、竪穴建物がある。竪穴建物からは6世紀後半の土師器が出土しており、この時期から下川原遺跡では集落が成立し始めたとみられる。その後、7世紀に集落のピークを迎える。

下川原遺跡は、植遺跡から後続する遺跡として位置づけられており、水口盆地での集落が野洲川の氾濫原から水口丘陵に近い、段丘上へと移動したことを示している。

大鳥居遺跡

大鳥居遺跡は、杣川左岸の段丘上、甲南町池田に位置する集落遺跡である。遺跡は平成6年度から9年度に実施した甲南町内詳細分布調査で確認された遺跡であり、平成15年に個人住宅建設に伴う本発掘調査を実施している。

調査では、自然流路および溝を検出している。溝は幅2.5m、深さ1mの規模であり、埋土は大きく3層に分かれる。中層からは古墳時代中葉から後葉の須恵器が出土しており、下層はシルト層となり、自然木が堆積している状況から、この溝内は滞水し、水の流れがあったと考えら

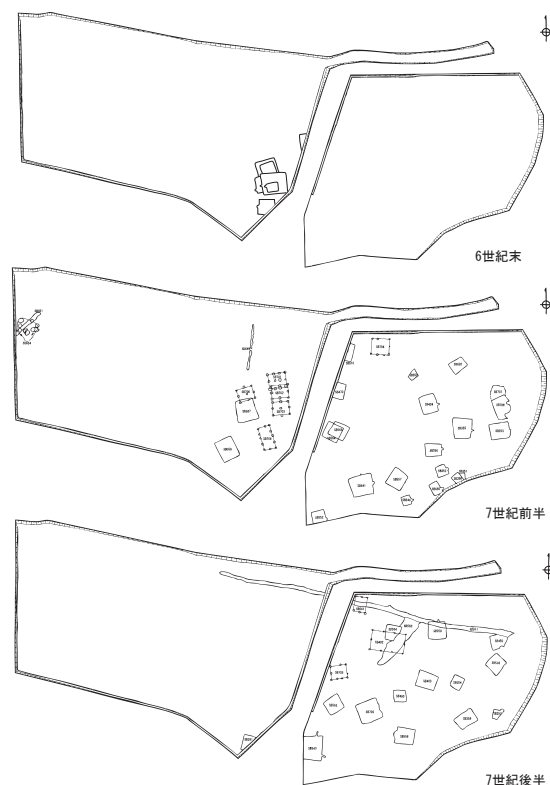


図12 下川原遺跡遺構変遷図

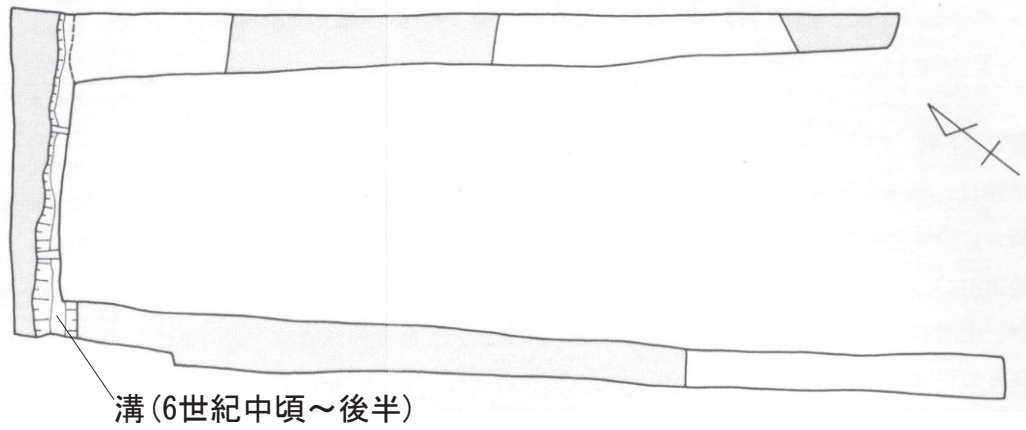


図 13 大鳥居遺跡遺構平面図

れている。

この溝は、出土遺物から古墳時代中葉から後葉に機能していたとみられ、溝内には水が流れていたことから、灌漑用水路として開削された可能性が指摘されている。

古墳時代後期の水口は、植遺跡のような5世紀前半から続く地域の中心的な集落が営まれ、下川原遺跡が6世紀後半に成立し、7世紀に隆盛することがわかっている。これは、水口盆地での人々の生活が植遺跡から下川原遺跡に移ったことを示している。その後の北脇遺跡や北泉遺跡などの奈良～平安時代の遺跡が、下川原遺跡の東側に成立していくように、安定した地盤の水口丘陵裾がこの地域の拠点となっている。また、大鳥居遺跡のように杣川流域でも古墳時代中葉以降には集落が存在していた。

貴生川遺跡では弥生時代中期の土器が出土しているが、5世紀後半には確実に集落が存在した。この時期は、植遺跡では竪穴建物を中心とした集落が営まれる時期である。植遺跡では、5世紀中頃には大型掘立柱建物が、6世紀後半には豪族居館が存在しており、これは市内の他の遺跡では見られない。つまり、植遺跡は5世紀中頃から6世紀後半の間、地域の中心的な集落であったと考えられている。対して貴生川遺跡は、植遺跡と比較しても確認している建物の数も少ないことから、小規模な集落であったとみられる。

また、古墳時代の貴生川遺跡を考える上で、杣川を挟んだ西側の飯道山東麓に築造された「甲賀群集墳」の存在は無視できない。甲賀群集墳は、6世紀以降に園養寺山古墳群をはじめとする大規模な群集墳であり、300基もの古墳が確認されている。その造墓集団は、水口町植に位置する植遺跡の集落であったと考えられている。植遺跡の発掘調査報告書では、植遺跡の中間層が園養寺古墳群の被葬者層であったと推定されている。なお、植遺跡以外にも甲賀群集墳を営んだ集団があったことが指摘されている。また甲賀群集墳はいくつかの古墳群に分れており、これは広範囲からの人々の参加があったことを示しており、それが古墳群の分布に表れていると考えられている（市史委2007）。

甲賀群集墳は、貴生川遺跡から杣川を挟んで近距離に位置しており、遺跡からも古墳群の場所を望むことができる。植遺跡と比較し、小規模な集落であったとしても、この位置関係や遺跡の

時期から、貴生川遺跡の集落も造墓集団の一つであったとみられる。そして貴生川遺跡は、植遺跡の中心とした地域社会の中に、周辺集落の一つとして組み込まれていたと考えられる。この点については、周辺の調査が進んでいないこともあり、今後の課題としたい。

第2節 平安時代末から鎌倉時代前半

貴生川遺跡では、調査成果から時期区分を、Ⅰ期（弥生時代）、Ⅱ期（古墳時代中期）、Ⅲ期（平安時代～鎌倉時代：11世紀末～13世紀中頃）、Ⅳ期（安土桃山時代～江戸時代初頭：16世紀後半～17世紀前半）の4期に分けている。さらに、Ⅲ期をⅰ段階（11世紀後半～12世紀前半）、ⅱ段階（12世紀後半）、ⅲ段階（13世紀前半）、ⅳ段階（13世紀前葉から中葉）の4段階に分けている。

今回の調査では、Ⅲ期－ⅲ段階の時期にあたる掘立柱建物を1棟検出した。北東－南西3間（約8.2m）、北西－南東3間（約6.5m）、主軸N35°E方向の総柱の掘立柱建物である。これまでの調査成果で明らかとなっている、Ⅲ期－ⅲ段階の建物等の主軸は、N35～38°Eのまとまりと



図14 貴生川遺跡（Ⅲ期－ⅲ段階）遺構図

N30～32° Eの2群に分かれ、今回検出された建物は前者に該当する。この時期は建物群の北側には鋤溝群が検出されており、耕作地が広がっていたと考えられていた。しかし、建物が鋤溝群のさらに北側で検出されていることから、集落がこれまでの範囲よりもさらに広がったと考えられる。

第3節 まとめ

第5次調査では、古墳時代後期の遺構を検出し、13世紀前半の集落の広がり確認できた。貴生川遺跡のある貴生川地域は、西から見ると杣川流域の甲南・甲賀地域の玄関口であり、南の信楽や伊賀への道が通るなど、交通の要衝である。さらに古代の倉歴道の推定ルート上にも位置し、現在では3つの路線が乗り入れる貴生川駅があり、現在でもその重要性は変わらない。また、貴生川遺跡は杣川が形成した安定した段丘面の上に立地している。このように交通の要衝であり、かつ地盤の安定した立地のため、人々の生活拠点となり、時には城が築かれた。この遺跡で、複数の時代の遺構が確認されることは必然である。現在、周知の埋蔵文化財包蔵地となっている範囲は、おおむね発掘調査が完了している。しかし、調査成果から遺跡周辺で新たな集落が発見される可能性がある。今後、周辺の調査が進むことで、貴生川地域をはじめとする甲賀市の歴史の解明につながることを期待する。

《参考文献》

- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2005『植遺跡』
- 甲賀市教育委員会 2005『平成15～16年度 甲賀市内遺跡発掘調査報告書』
- 甲賀市教育委員会 2006『下川原遺跡発掘調査報告書』
- 甲賀市史編さん委員会 2007『甲賀市史』第1巻 古代の甲賀
- 甲賀市教育委員会 2008『北脇遺跡発掘調査報告書』
- 甲賀市教育委員会 2008『中世城館遺跡（甲南地域）調査報告書』
- 甲賀市教育委員会 2008『北脇遺跡・西林口遺跡発掘調査報告書』
- 甲賀市教育委員会 2009『下川原遺跡発掘調査報告書』
- 甲賀市教育委員会 2010『北脇遺跡第12次・下川原遺跡第10次発掘調査報告書』
- 甲賀市教育委員会 2011『下川原遺跡第11次・竹石遺跡第1次発掘調査報告書』
- 甲賀市史編さん委員会 2013『甲賀市史』第5巻 信楽焼・考古・美術工芸
- 甲賀市教育委員会 2013『下川原遺跡第12次発掘調査報告書』
- 甲賀市教育委員会 2016『水口岡山城跡総合調査報告書』
- 甲賀市教育委員会・滋賀県文化財保護協会 2017『貴生川遺跡発掘調査報告書』
- 甲賀市教育委員会 2018『貴生川遺跡第4次発掘調査報告書』

写真図版

図版 1 SK001



SK001 須恵器取り上げ前（西から）



SK001 須恵器出土状況（東から）



SK001 完掘（西から）



SK0072 断割（西から）

図版 3 SB002



SB002 検出 (東から)



SB002 完掘 (東から)



SP003 断割



SP006 断割



SP008 断割



SP013 断割



SK001 出土須恵器蓋 (1)



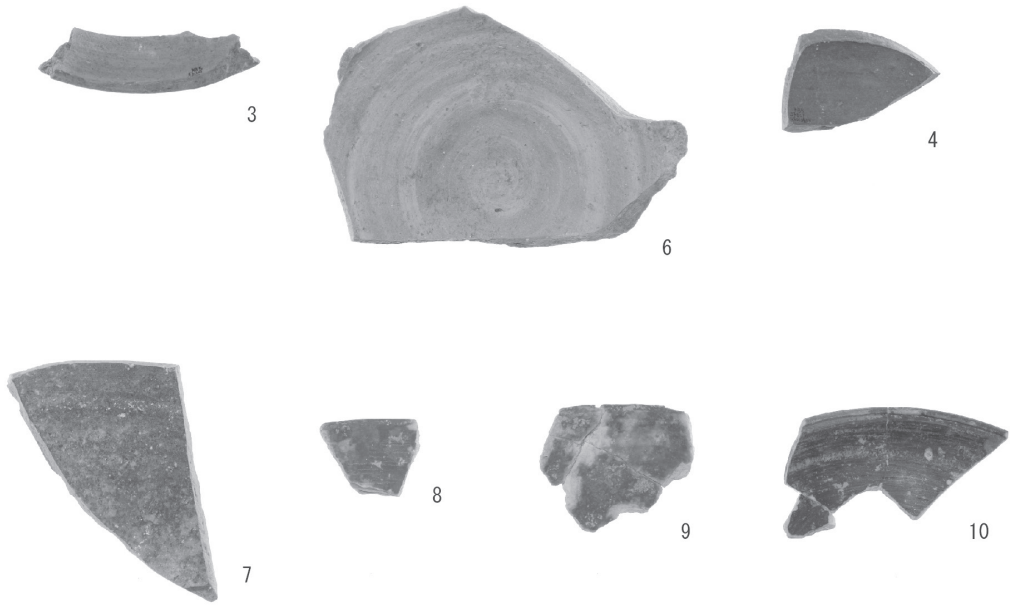
SK001 出土須恵器身 (2)



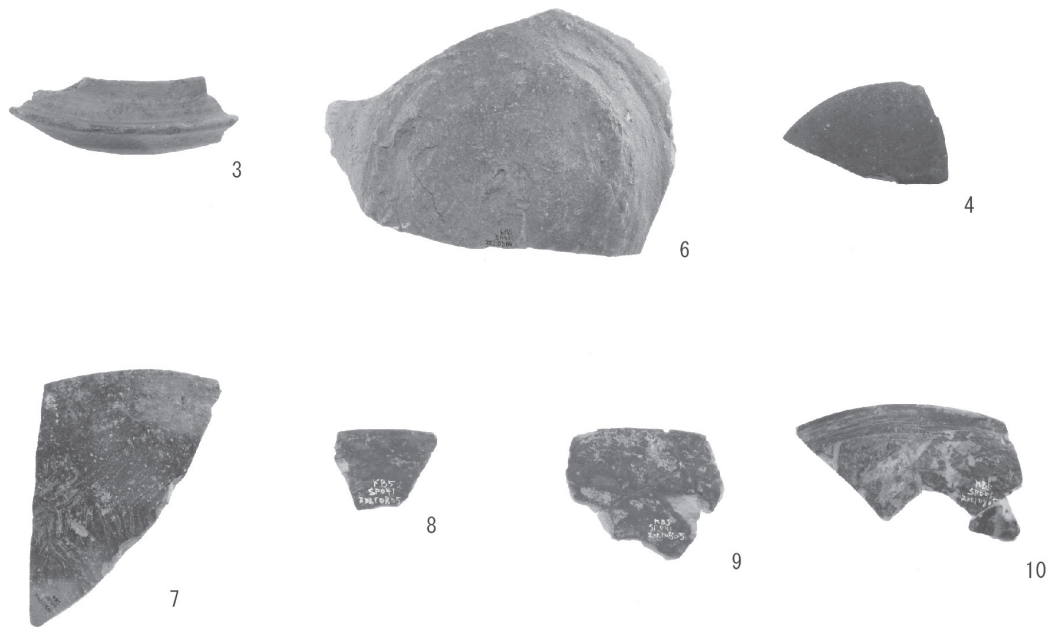
SK001 出土須恵器



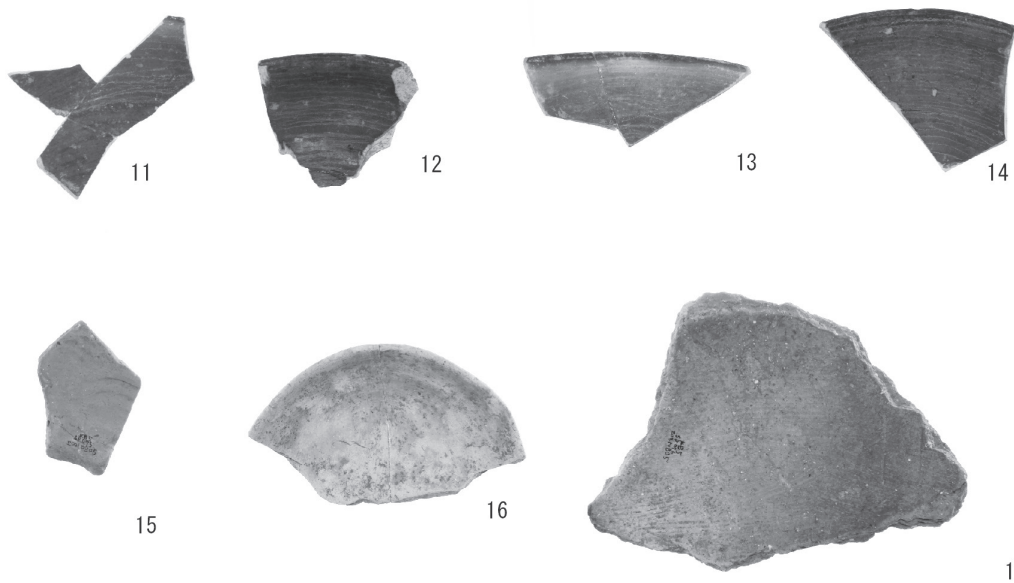
SK001 出土須恵器甕 (5)



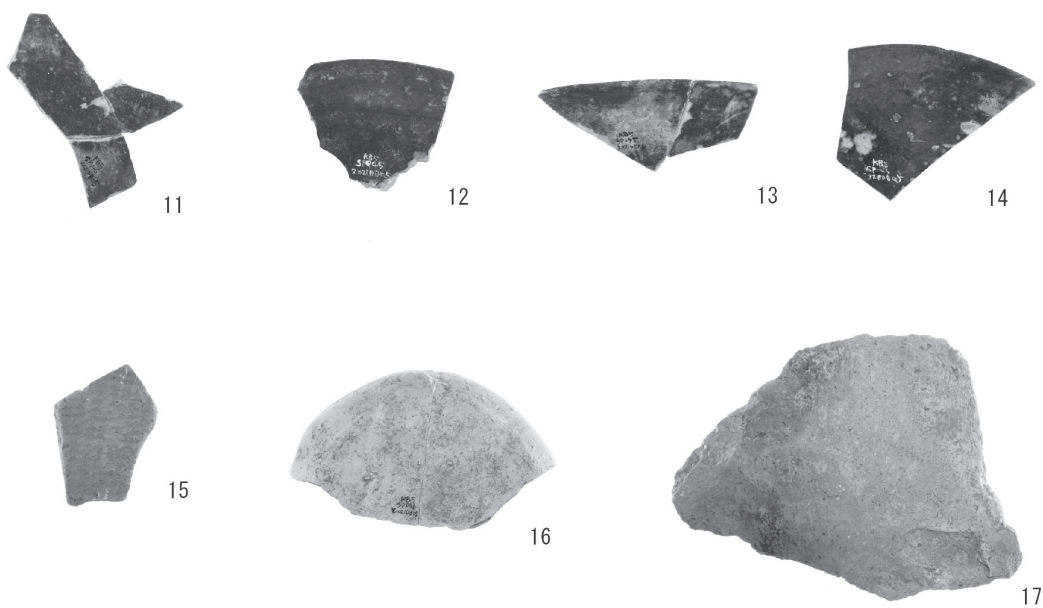
出土遺物(4~10)内面



出土遺物(4~10)外面



出土遺物 (11 ~ 17) 内面



出土遺物 (11 ~ 17) 外面

報告書抄録

ふりがな	きぶかわいせきだいごじはくつちょうさほうこくしよ							
書名	貴生川遺跡第5次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	甲賀市文化財報告書							
シリーズ番号	第39集							
編著者名	伊藤航貴							
編集機関	甲賀市教育委員会							
所在地	滋賀県甲賀市水口町水口6053番地							
発行年月日	令和4年(2022年)3月25日							
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積 (㎡)	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
きぶかわいせき 貴生川遺跡	甲賀市水口町貴生川	25209	363-139	34° 95' 73.8"	136° 14' 86.7"	400	2021.7.9~ 2021.8.31	集合住宅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
きぶかわいせき 貴生川遺跡	集落	古墳、中世		掘立柱建物、土坑、ピット		須恵器、瓦器、土師器		

甲賀市文化財報告書第39集
貴生川遺跡第5次発掘調査報告書

印刷・発行 2022年3月25日
編集・発行 甲賀市教育委員会
滋賀県甲賀市水口町水口6053
TEL 0748-69-2251
FAX 0748-69-2293
印刷 株式会社トップ

